

外部評価委員会 評価結果報告書

平成25年5月

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター
(東京都健康長寿医療センター研究所)

ま え が き

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター研究所は、東京都における高齢者医療・老年学・老年医学の研究拠点として、病院部門と連携し、老化メカニズムと制御に関する研究、重点医療（血管病・高齢者がん・認知症）に関する病因・病態・治療・予防の研究、高齢者の健康長寿と福祉に関する研究、の3つの研究分野において重点的に研究を行い、高齢者医療の充実と高齢者の健康維持・増進を目指す研究を着実に推進してきました。平成24年度は、当センターの第1期中期目標・中期計画の最終年度にあたります。

研究所は、自然科学系と社会科学系の2系に分かれております。自然科学系は、老化機構研究チーム、老化制御研究チーム、老年病研究チーム、老年病理学研究チーム及び神経画像研究チームの5チームで構成され、社会科学系は、社会参加と地域保健研究チーム、自立促進と介護予防研究チーム及び福祉と生活ケア研究チームの3チームで構成されています。また、社会科学系では、新たに東日本大震災被災者支援研究及び4つの長期縦断研究にも取り組んでいます。研究チームについては第1期中期目標・中期計画の最終年度としての平成24年度の研究計画と成果に関して、また、東日本大震災被災者支援研究及び4つの長期縦断研究については、平成24年度における研究計画と成果に関して、外部評価委員による評価をお願いしました。

委員の皆様方には、大変ご多忙な中、研究所の今後のために貴重なご意見やご助言を賜り、心より感謝申し上げます。いただきましたご意見やご助言を踏まえ、自己改革の努力を一層積み上げ、第2期中期目標及び中期計画の達成を目指して今後も研究を進めていく所存です。

都民の皆様、ご関係の皆様には、今後とも当研究所の活動にご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター
(東京都健康長寿医療センター研究所)
センター長 井 藤 英 喜

外部評価委員会の実施状況

○自然科学系

平成25年2月19日（火）

午後1時00分から

○社会科学系

平成25年2月21日（木）

午後1時00分から

東京都健康長寿医療センター研究所外部評価委員会 委員名簿

自然科学系研究外部評価委員会

区 分	氏 名	所属・役職名
学識経験者	あらい へい伊 新井 平伊	順天堂大学医学部・大学院医学研究科教授
	いしい なおあき 石井 直明	東海大学 医学部 教授
	しもかど けんたろう 下門 顕太郎	東京医科歯科大学大学院・医歯学総合研究科血流制御内科学分野教授
都民代表	こじま まさみ 小島 正美	毎日新聞社 生活報道部 編集委員
行政関係者	はげやま ひでお 栢山 日出男	東京都福祉保健局 施設調整担当部長

社会科学系研究外部評価委員会

区 分	氏 名	所 属
学識経験者	おおた きくこ 太田 喜久子	慶応義塾大学 看護医療学部 部長
	おさだ ひさお 長田 久雄	桜美林大学大学院 老年学研究科 教授
	やすむら せいじ 安村 誠司	福島県立医科大学 医学部 公衆衛生学講座教授
都民代表	ほんだ まゆみ 本田 麻由美	読売新聞 東京本社 編集局 社会保障部記者
行政関係者	はげやま ひでお 栢山 日出男	東京都福祉保健局 施設調整担当部長

外部評価委員会 評価総括表

【各5点満点】

「自然科学系」… 遠藤玉夫(副所長)

順位	チーム名 (リーダー名)	1. 研究計画 の創造性・ 妥当性	2. 研究成果	3. 研究成果 の還元	4. 今後の展 望と発展性	総合評価
評価ウェイト		1	3	1	1	
5	老化機構研究チーム (遠藤 玉夫)	4.6	3.8	3	4.2	3.86
1	老化制御研究チーム (田中 雅嗣)	4.6	4.6	4.2	4.6	4.53
4	老年病研究チーム (重本 和宏)	4.2	4.2	3.4	4.2	4.06
1	老年病理学研究チーム (丸山 直記)	4.4	4.6	4.6	4.4	4.53
3	神経画像研究チーム (石渡 喜一)	4.4	4.2	4	4.6	4.26

外部評価委員会 評定総括表

【各5点満点】

「社会科学系」・・・高橋龍太郎(副所長) (チーム研究)

順位	チーム名 (リーダー名)	1. 研究計画 の創造性・ 妥当性	2. 研究成果	3. 研究成果 の還元	4. 今後の展 望と発展性	総合評価
評価ウェイト		1	2	2	1	
2	社会参加と地域保健研究チーム (新開 省二)	4.2	4	4.2	4.6	4.2
1	自立促進と介護予防研究チーム (栗田 圭一)	4.4	4.6	4	4.4	4.33
3	福祉と生活ケア研究チーム (石崎 達郎)	4.2	3.8	3.6	3.8	3.8

(東日本大震災被災者支援研究)

順位	テーマ名 (リーダー名)	1. 研究計画 の創造性・ 妥当性	2. 研究成果	3. 研究成果 の還元	4. 今後の展 望と発展性	総合評価
評価ウェイト		1	2	2	1	
	東日本大震災被災者支援研究 (高橋 龍太郎)	4.6	4.8	4.6	4.4	4.63

(長期縦断研究)

順位	テーマ名 (リーダー名)	1. 研究計画 の創造性・ 妥当性	2. 研究成果	3. 研究成果 の還元	4. 今後の展 望と発展性	総合評価
評価ウェイト		1	2	2	1	
2	SONIC研究 (高橋 龍太郎)	4.4	4	3.4	4.2	3.9
1	虚弱(frailty)の予防戦術の 解明を目的とした長期縦断研究 (新開 省二)	4.4	4.2	3.4	4.2	3.96
3	高齢期の健康と自立の維持と要介護予防 のための新たな検診システムの開発研究 (吉田 英世)	4	3.8	3	4	3.6
4	都市高齢者の社会・経済・ 健康格差を乗り越える研究 (大淵 修一)	4.2	3.2	2.6	3.8	3.26

自然科学系(A系)報告

自然科学系 外部評価委員会
委員長 下門 顕太郎

東京都健康長寿医療センター研究所における自然科学系の老化機構研究チーム、老化制御研究チーム、老年病研究チーム、老年病理学研究チーム、神経画像研究チームの5チームについて、事前に提出された研究報告書と当日のプレゼンテーションを基に評価を行った。評価に当たっては各評価委員が、あらかじめ定められた評価項目及び評価視点につきコメントを付した評価を行った。また委員長が全体の意見の取りまとめを行った。

① 老化機構研究チーム

本チームは糖鎖・超百寿者・剖検例の利用など当研究所の得意分野をキーワードとした独創的で競争力のある研究を行っている。酸化ストレス応答の分子修飾の解明、超百寿者のマーカー、活性酸素生成の計測など成果は大きく進んでおり、実用化への期待は大きい。特にバイオマーカーに関しては、産業に直結し得る研究が進行している。一方で、すぐれた研究成果の、マスコミを通じた社会へのアピールは十分ではなく、基礎研究であるため、行政・地域・産業等の施策への貢献も特段優れているとは言えない。実用化に向けた取り組みも開始されており、今後の発展が期待される。

② 老化制御研究チーム

老化促進モデルマウスの病因解明、ALDH2 と血管老化の解明、若年性パーキンソン病の危険因子、線虫を用いた老化関連遺伝子の解明、ビタミン C 不足と慢性閉塞性呼吸器疾患発症との関係、水素水による抗がん剤ゲフィチニブの副作用抑制、老化指標蛋白 SMP30 と老化の関連解明、コエンザイム Q による老化制御のメカニズム等、どれも新規性に富む優れた研究である。各種研究成果が一般にも紹介され、かなり還元度は高い。基礎研究の実用化が積極的に行われているが、よりインパクトの強い実用化への取り組みが期待される。

③ 老年病研究チーム

血管病、生活習慣病、運動器それぞれに、独創的な研究が計画され、病院や他施設との連携も図られている。血管病に関しては、我が国の再生医療の実施に向けた仕組みづくりの重要な一翼を担っている。骨粗鬆症のリスクの診断法の開発により恩恵を受ける高齢の都民は少なくないと言える。運動器に関しても重症筋無力症モデルをもちいて治療薬開発につながる研究成果がえられている。一方で、優れた研究成果の一般への広報は不十分で広報活動の強化が必要であると言える。重要性も質も高い研究が進行してお

り、今後の発展が期待される。

④老年病理学研究チーム

癌、神経病理という老年医学にとって重要な分野の研究およびリソースバンク事業の関係が目に見える形で説明されており、それぞれの分野で他施設の追随をゆるさない実績に基づく独創的で必要性の高いテーマについての研究が行われている。癌にしても認知症にしても、得られた研究成果の実臨床への貢献が大きい。また、高齢者ブレインバンクは、豊富な高齢者の剖検材料を用いた研究が可能な本邦唯一といってよい施設であり、形態病理学が衰退する中、分子生物学や画像医学と連携して質の高い研究を行っている。他の分野とは異なり、優れた研究者であっても患者情報や剖検材料の蓄積がなくては実施不可能な分野でもあるので、他国内外の分野他施設との連携を強化して今後も発展させていく必要がある。

⑤神経画像研究チーム

豊富な実績に基づき、画像データベース、認知症発症前から剖検までの追跡調査、新たな診断薬の開発など、優れた研究計画に基づく研究を行っている。また、研究は順調に進展しており、多くの業績を上げている。社会の高齢化にともない認知症患者が増加しており、本部門がおこなっている認知症の早期診断の研究は重要性、緊急性ともに高いと言える。一方で、十分な成果をあげていながら、ニュースになる度合いが少ないところがあり、もっと地域や産業に貢献している様子を広く訴えてもよいのではないかとと思われる。全体に臨床と結び付けて着実に歩んでいると判断されるので、今後に期待したい。

まとめ

研究は順調に進展しており、すべてのチームが優れた業績を上げている。基礎研究の成果を実用化するための仕組みも整備され今後その成果が期待される。他方以前から指摘されている研究成果の社会への広報は、一部改善されたとはいえ十分とは言えない。東京都の広報活動に依存するだけでなく、プレスカンファレンス、マスコミ向けのレクチャー、外部評価委員会のマスコミへの公開など積極的な独自の取り組みが望まれる。

超高齢化社会において本研究所の果たす役割はますます重要になると思われる。高い活動性を維持するために、十分な経済的な支援確保と持続的な組織の活性化を期待したい。

自然科学系 外部評価委員会 チーム別評定結果

【各5点満点】

●老化機構研究チーム

チームリーダー：遠藤玉夫

各委員 の評点	1 研究計画の創造性・妥当性	2 研究成果	3 研究成果 の還元	4 今後の展望 と発展性	5 総合評価
平均点	4.6	3.8	3	4.2	3.86

5点×3名

4点×2名

5点×1名

4点×3名

2点×1名

4点×1名

3点×3名

2点×1名

5点×3名

4点×1名

2点×1名

5チーム中 5位

評点の理由、コメント

1 研究計画の創造性・妥当性	平均4. 6点
・糖鎖・超百寿者・剖検例の利用など当研究所の得意分野をキーワードとした独創的で競争力のある研究計画である。 ・①分子機構：糖鎖解析では独創性が感じられ、臨床データとしての必要性も高い ②分子機構・プロテオーム：病院や他のチーム、外部との連携が良いと感じられる ③新規バイオマーカーの研究は始まったばかりだが将来性が感じられる ④レドックス研究グループの「活性酸素発生の還元ストレス仮説」は活動時・休息時という実際の生活の場における活性酸素発生の機構を解明する新規の研究であり、科学のおよび社会的な貢献度が高い。 ⑤外部資金の獲得も順調 ・アルツハイマー病の糖転移酵素、老化とレドックス能の動態解析、超百寿者の糖たんぱく質の解析はとてすぐれているし、興味をひく。グルクナックは糖尿病治療のマーカーになる可能性があり、とてもすばらしい研究。 ・相応の展望をもった計画が数多く提唱された。 ・研究所の基礎を形づくる分野だと思いますので、皆様の努力に期待します。	
2 研究成果	平均3. 8点
・すべての分野で、研究は順調に進捗しているが、本年度に限ると目覚ましい新発見が発表されたとはまでは言えない。 ・①認知症、Klotho、筋形成・機能維持に関する糖鎖研究は成果を着々と上げている ②レドックスに関しては装置の開発が予定通り進んでいる ③論文として成果発表もされている ・酸化ストレス応答の分子修飾の解明、超百寿者のマーカー、活性酸素生成の計測など成果は大きく進んだ。実用的な有用性への期待は大きい。 ・相応の成果が出されている。 ・糖鎖の解析について、一定の前進があったことは認められるが、具体的な成果が計れない。	

3 研究成果の還元	平均3点
・特にバイオマーカーに関しては、産業に直結し得る研究が進行している。 ・①行政・地域・産業等の施策への貢献・反映・期待感はまだ薄いものの、将来影響力は強くなると感じる ・すぐれた研究が多い割には、マスコミを含めた一般人への還元は少ない。都のプレス発表がひとつもなかったのは大きな課題。少なくとも、いくつかの研究は新聞や科学雑誌の科学記事になっていてもおかしくない内容が多い。東京都の記者クラブでなく、科学・健康・医療を担当する記者たちに直接、働きかけて記者会見を行えば、もっと一般に還元できるはずだ。 ・成果の還元は未だ未達成との印象を受けた。 ・糖鎖関連で特許があると聞きました。	
4 今後の展望と発展性	平均4.2点
・老化機構の解明に向けて、当研究所が優位性をもつ方法論で着実に研究を進めており、大きな成果が期待される。 ・① 糖鎖研究や新規バイオマーカー(マイクロRNAの同定とその臨床応用)と超百寿者に関する健康寿命マーカーの探索は老化の基礎から臨床・社会貢献まで、幅広い貢献が期待できる ② 研究半ばのものが多いが、研究継続の方向性・必要性・妥当性・発展性は大きい。 ・いずれも有用な成果をあげており、今後への期待は大きい。 ・臨床との共同研究になろうが、今後の発展性には期待を持った。 ・他チームとの連携・協力なども説明いただけると良かった。	
5 総合評価	平均3.86点
・他部門との共同研究も軌道に乗り、糖鎖研究を中心とした研究は今後の発展が期待できる。 レドックスに関する研究も地味ではあるが、老化研究では歴史的にも重要な問題を独自の仮説を独自の方法で追及しており、ブレイクスルーが期待できる。チーム全体のテーマの幅、質とも充実している。 ・老化のモデル動物としてKlothoを選択したのは疑問だが、異常糖鎖が上昇し、これが自然老化マウスでも認められたことは大きな成果である。今後、この異常糖鎖の老化への関与に関して詳細な研究を望む。 それぞれの研究グループに特徴があり、成果を上げていると感じた。 挫折することなく研究を継続し、成果を社会に還元して欲しい ・老化のメカニズムの解明につながる研究は着々と進んでいるような印象をもちました。共同研究の推進も高く評価できます。 ・昨年度の報告より充実した成果を感じ、チームとしてのactivityが向上したとの印象です。 ・2	

6 評価を終えて

・基礎研究の成果を社会に還元することは困難であるが、老化研究はアカデミックな分野では重要な位置を占めるようになっており、現在世の中で注目されているアンチエイジング(抗加齢)は老化の基礎研究に基づいている。老化研究は横断的なもので成果を上げることは難しく、長期に渡る縦断的な研究が必要となる。そのため支援も長期的・継続的であることが重要である。

・3でも述べたように、せっかくの研究成果がニュースになっていないのが残念です。都庁の記者クラブにリリースを投げ込むだけでは不十分です。都庁詰めの記者は社会部出身が多いので、科学のことを詳しく知る記者はあまりいません。おそらく投げ込みのリリースでは、記者たちにとって初めて聞く内容ばかりなので、よほどの関心がないとニュースにしにくい面があります。やはり会見を開いて、レクチャーをする必要があります。他の研究機関は年に2回くらいは、記者を集めて、レクチャーをしています。5、6人の研究者がまとまって、会見に出席し、ちゃんと説明するのがよいと思います。

・研究所の構造上仕方ないと思われるが(基礎部門が二つ位は必要と判断するので)、老化機構と老化制御の違いが分かりづらく、今後の再編がある際には再考されても良いのではとの印象を受けた。

・外部評価委員は、専門家であり、一定のレベルで説明すべきかと思うが、都民向けにわかりやすい解説の部分があっても良かったのではないかと思います。

聞く者にわかってもらおうという工夫を望みます。

自然科学系 外部評価委員会 チーム別評価結果

【各5点満点】

●老化制御研究チーム

チームリーダー：田中雅嗣

各委員の評点	1 研究計画の創造性・妥当性	2 研究成果	3 研究成果の還元	4 今後の展望と発展性	5 総合評価
平均点	4.6	4.6	4.2	4.6	4.53
	5点×3名 4点×2名	5点×3名 4点×2名	5点×1名 4点×4名	5点×3名 4点×2名	

5チーム中 1位

評点の理由、コメント

1 研究計画の創造性・妥当性	平均4.6点
・個々には優れた研究が計画されているが、基礎研究から産業応用まで範囲が広がったため、このチーム全体の戦略が見えにくい。 ・①全エクソン解析は時間・資金・人材が豊富になければできない研究であり、研究所ならではの研究内容として高く評価する ②それぞれの研究グループで大きな成果が上がってきている。 ③老化再生研究グループのCilostazol投与研究は独創的 ④外部資金獲得額が多く、大きな努力が感じられる。外部との連携が豊富 ・老化促進モデルマウスの病因解明、ALDH2と血管老化の解明、若年性パーキンソン病の危険因子、線虫を用いた老化関連遺伝子の解明、ビタミンC不足によるCOPDの発症関連、水素水によるゲフィチニブの副作用抑制、ヒトSMP30の発現と老化の関連解明、コエンザイムQによる老化制御のメカニズム、どれも興味深く、おもしろく、新規性に富んでいる。 ・それぞれ必要性の高い課題である。 ・宇宙環境を用いた老化研究など独創性がある。	
2 研究成果	平均4.6点
・多くの研究は順調に遂行されているが、今年度に限ればインパクトの大きな論文が多いとは言えない。 ・①チーム全体で多くの学会発表、論文投稿がなされ、大きな成果が上がっている。 ②線虫で長寿に関連した遺伝子を同定したことは高く評価する。 ③ビタミンCの研究は高齢者の健康にまで研究が大きく進んでいる。 ④自律神経機能研究グループではさまざまな刺激に対する生体反応の研究に成果が得られている ⑤環境老化研究グループの水素とCoQの研究と老化再生研究グループは成果を上げているが、メカニズムを解明することに期待する。 ・老化促進モデルマウスの遺伝子多型解析、若年性パーキンソン病の危険因子としての不良ミトコンドリアの解明、宇宙環境で変化する線虫の遺伝子の解明、ビタミンC不足によるCOPDの発症関連、水素水によるゲフィチニブの副作用抑制、アルツハイマー病のシトルリン化たんぱく質の増加解明、マイネルト核のイメージング研究などは、目標到達度が高い。成果も確実に出て印象を受けた。 ・臨床に結びつく可能性が高い成果が得られてきている印象を受けた。 ・具体的な成果が期待できる。	

3 研究成果の還元	平均4. 2点
・最も産業への貢献が期待される成果が出ているチームである。 ・①行政・地域・産業等の施策への貢献・反映・期待感はまだ薄いものの、将来影響力は強くなると感じる ・各種研究成果が一般にも紹介され、かなり還元度は高い。マスコミに取りあげられる頻度は、他の研究と比べて高く、その意味でも今後への期待は高い。 ・還元は今後に期待したい。 ・具体的に慢性痛緩和の創薬につながった事例がある	
4 今後の展望と発展性	平均4. 6点
・基礎研究から発展して実用化が見込める研究が複数ある。 ・①研究半ばのものが多く、研究継続の方向性・必要性・妥当性・発展性は妥当。今後が楽しみ ②ミトコンドリア研究では多くの成果を上げているが方向性が少し不明瞭。遺伝子多型と病気の関連性をメカニズムの面から追う基礎研究も必要と考える。 ・ビタミンCによるCOPDの前向き介入試験に期待が高まるだけに、将来への期待は非常に大きい。遺伝子解析の剖検例(エクソン解析)をもっと増やせば、さらにすばらしい結果が出る可能性が高い。微小突起で足の裏を刺激して慢性疼痛を抑える研究は、自宅でできる方法として具体的な実用化案を考えたらどうでしょうか。身体活動別に見たメタボの関連研究もさらに充実すれば、社会的な実用化への期待が大きい。また、水素水の抗ガン剤副作用の軽減はぜひ臨床試験まで進めてほしい。このチームの一連の研究は全般的に期待が大きい印象を受けた。 ・大きな展開に結びつくことを期待できた。 ・ビタミンC、水素水など今後期待できる。体毛への影響など面白そうな話を聞けました。	
5 総合評価	平均4. 53点
・連続剖検例や老化モデルマウスの網羅的な遺伝子解析のような、重要な基礎的研究から、ミトコンドリア病のピルビン酸による治療や、ビタミンC、水素水、微小突起による皮膚刺激など実用化したあるいは実用化に近い研究まで含まれるので、全体の戦略が見えにくい。このチームに限らず、実用化に関しては、産業化に詳しい人材を雇って、企業との連携、特許の取得、バイオベンチャーの立ち上げなどに特化した部門を創設する必要がある。 ・線虫で長寿関連遺伝子を見つけたことは大きな成果。マウスなど他の実験動物で研究を始める前にこれらの遺伝子の機能解析を線虫できちんとやるのが重要。 全体的に成果が上がってきており、今後の展開が楽しみ。 ・総合的にすぐれた成果が多く、全体評価も「5」といえる。都民の健康向上につながる研究が多く、今後の実用化に大きな期待がもてる ・昨年に比べ確実に研究が進んでいるとの印象を受けた。 ・具体的な成果をもたらすことを期待しています。4。	

6 評価を終えて

・それぞれの研究グループで成果が上がってきたので、研究を止めることなく研究所全体で継続的・長期的な支援を望みます。

・マスコミでの取りあげ方も比較的多く、まずまずですが、それでも、もっとニュースになってもよい研究がたくさんある。これも、すでに述べたが、記者向けに定期的なレクチャーをすれば、もっとニュースになると思う。

自然科学系 外部評価委員会 チーム別評定結果

【各5点満点】

●老年病研究チーム

チームリーダー：重本和宏

各委員 の評点	1 研究計画の創造性・妥当性	2 研究成果	3 研究成果 の還元	4 今後の展望 と発展性	5 総合評価
平均点	4.2	4.2	3.4	4.2	4.06

5点×2名

4点×2名

3点×1名

5点×2名

4点×2名

3点×1名

5点×1名

4点×1名

3点×2名

2点×1名

5点×2名

4点×2名

3点×1名

5チーム中 4位

評点の理由、コメント

1 研究計画の創造性・妥当性	平均4.2点
・血管病、生活習慣病、運動器それぞれに、独創的な研究が計画され、病院や他施設との連携も図られている。 ・①iPS細胞を用いた老化モデル、ウエルナー症候群の診断基準など必要性が高い研究をおこなっている。 ②運動器医学研究グループでは重症筋無力症の動物モデルを用いた治療薬探索及び、筋線維タイプの可視化研究は独創性・新規性・必要性の高い研究として評価される。 ③臨床との連携、外部との連携が強いが、それゆえに独創性に弱さを感じる。 ・心筋幹細胞の自動培養化の成功、遺伝子多型の解析による骨粗鬆症の発症リスク予測、ウエルナー症候群のアキレス腱石灰化の特徴の解明と遺伝子多型との関連解明、マウスを用いた筋の代謝変換の分子メカニズム可視化、運動神経細胞の培養技術の確立、など新規性にもすぐれた研究が見られる。 ・それぞれ臨床的に興味深い。	
2 研究成果	平均4.2点
・研究が進行し、成果が出ている。 ・①どの研究グループも学会発表・論文投稿が多いが、生活習慣病研究グループはFirstあるいはCorresponding authorの論文がない。 ②血管医学研究グループはまだ研究途上であり、評価するのは時期尚早。 ③生活習慣病研究グループもウエルナー症候群と大腿骨骨折に関連あるSNPを見出したが、検証はこれから。運動器医学研究グループは重症筋無力症の動物モデルを用いた治療薬の発見、筋線維タイプを可視化できる技術を使い、超高齢マウスの筋線維の変化を捉えるなど、大きな成果が得られている。 ・筋萎縮の発症モデルマウスを用いた実験は、治療薬にもつながり、大きな成果をあげている。ウエルナー症候群の研究も診断基準の向上に大きく貢献できる要素をもち、成果は着々と進んでいる印象をうけた。遺伝子多型の解析は骨粗鬆症の新しい診断基準になる可能性を秘める。筋と運動神経の相互維持作用の研究は、いつか高齢者のリハビリ促進に役立つ要素をもつ印象をもった。 ・成果及び次の還元が得られる前の段階か。 ・マウスの開発など地道な努力があった。サルコペニアに関し、効果があった。	

3 研究成果の還元	平均3.4点
・血管病に関しては我が国の再生医療の実施に向けての活動の重要な一翼を担っている。骨粗鬆症のリスクの診断法の開発により恩恵を受ける高齢の都民は少なくない。 ・①3つの研究グループの研究はまだ研究途上にあるが、将来、科学的また社会的に大きく貢献するものと期待される。 ・老化機構研究チームで述べたように、ニュース価値の高い研究が多いのに、あまり一般に知られていないのは残念だ。研究途上の話でも、こんな研究をしているという観点で研究者に焦点をあてたニュースにもなる話が多いと感じた。本当にもったいない。 ・積極的な発信を期待する。	
4 今後の展望と発展性	平均4.2点
・重要性も質も高い研究が進行しており、今後の発展が期待される。 ・①運動器医学研究グループでは研究継続の方向性・必要性・妥当性・発展性に問題なし ②血管医学研究グループと生活習慣病研究グループの遺伝子の多様性と骨折との研究で成果を上げるためには両者の関係を分子レベルで解明できるかどうかにかかっている。 ・サルコペニアの診断基準を提案するなど着々と実用化に向けた成果が出ている印象を受けた。移植に必要な幹細胞の適切な管理に向けた研究も成果を生んでいる。幹細胞を用いる再生医療に貢献できる研究も大いに期待したい。 ・発展性には期待がもてる。	
5 総合評価	平均4.06点
・血管病、生活習慣病、運動器疾患とも、異なる手法で臨床と結びつく着実な成果を出している。今後も異なるスピードで、都民に還元されるような結果が出ることが期待される。血管病に関しては、他施設との連携で我が国の再生医療の構築には貢献していることが理解できるが、当研究所独自の研究に関しては今後の発展を期待したい。 ・運動器医学研究グループは着々と成果を上げている。 血管医学研究グループと生活習慣病研究グループはまだ研究途上にあるが、発展性が期待できる研究内容である。 ・すばらしい研究が多く、成果も着々と出ていると思う。骨粗鬆症の診断診療システムの開発は特に期待できる。 ・昨年は華々しい成果があったと思う。確実に歩みを進めているが、次の大きな成果を得るまでの中途にあるかとの印象あり。 ・3	
6 評価を終えて	
・全体としてすぐれた研究が多いのに、やはり一般への認知度が低いのが惜しまれる。広報活動の強化が必要。	

自然科学系 外部評価委員会 チーム別評定結果

【各5点満点】

●老年病理学研究チーム

チームリーダー：丸山直記

各委員 の評点	1 研究計画の創造性・妥当性	2 研究成果	3 研究成果 の還元	4 今後の展望 と発展性	5 総合評価
平均点	4.4	4.6	4.6	4.4	4.53

5点×3名
4点×1名
3点×1名

5点×3名
4点×2名

5点×3名
4点×2名

5点×2名
4点×3名

5チーム中 1位

評点の理由、コメント

1 研究計画の創造性・妥当性	平均4.4点
・癌、神経病理という老年医学にとって重要な分野の研究およびリソースバンク事業の関係が、外にも見える形で説明された。それぞれの分野の研究計画は、当該分野では他施設の追随をゆるさない実績に基づく独創的で 必要性が高いテーマについての研究が計画されている。 ・①臨床応用ができる研究が多く、研究が活発である。 ②外部との共同研究も多い ③外部資金獲得も順調である ④閉経後女性結腸癌とER-β 遺伝子CA repeatの関係は新規で独創的 ・老年性疾患とテロメア長との関連研究、遺伝子多型と閉経後の女性の結腸がんの関連研究、皮質下認知症の解明をめざす線状体のシナプス可塑性の異常の研究、高齢者ブレインネットワークの整備、剖検の検索など、すぐれた研究が多い。他の施設との連携も評価できる。 ・妥当性は例年どおり相応のものと思われる。	
2 研究成果	平均4.6点
・それぞれの分野が質的にも量的にも優れた成果をあげている。 ・①テロメアに関してはさまざまな疾患において研究がなされている。 ②閉経後女性結腸癌とER-β 遺伝子CA repeatの関係、イソフラボンによる予防は社会への貢献度が期待される。 ③神経病態生理研究グループは着実に成果を上げている。 ④高齢者ブレインバンク研究は世界的なレベルで行われていて称賛に値するが、健康長寿医療センターがどこを担っているのかが良く分からなかった。 ・テロメア長の測定計を確立して、糖尿病にかかわる新知見を明らかにするなど、相当の成果をあげている。遺伝子多型の解明を通じたエストロゲンと女性の結腸がんの関係も大きな成果であり、今後、がんの予防にも役立つ成果だ。線状体のシナプス研究も今後の成果が期待できる印象をもった。 ・着実な成果。 ・ブレインバンクの維持と発展は研究所の大きな成果。	

3 研究成果の還元	平均4.6点
・癌にしても認知症にしても、得られた研究結果の実臨床への貢献が大きい。 ・①高齢者ブレインバンクは世の中に大きな貢献をされると考えられるが、せつかくの事業なので、学会ではなく行政を利用して、当病院の患者のみならず、一般人に対する理解・宣伝も必要では。 ・豆腐を食べて、がん予防という研究成果がニュースになるなど、そこそこの還元はあるが、まだまだニュースになる話は多い。遺伝子多型の話は難しいが、こういう分かりやすい女性のがんをテーマにしてニュースをつくることは可能だ。自分たちの研究の枠にとどまることなく、自分たちの研究(女性のがんという身近なテーマ)を通じて、遺伝子多型のことを知ってもらうという情報発信もありうると感じた。科学的な情報を都民に発信するという目的をもてば、これが可能になるのではないかな。 ・還元も相応で存在意義は高い。 ・早期診断による医療費の削減、イソフラボンと結腸がん予防は興味深い。	
4 今後の展望と発展性	平均4.4点
・豊富な高齢者の剖検材料を用いた研究が可能な本邦唯一といってもよい施設であり、形態病理学が衰退する中、分子生物学や画像医学と連携して質の高い研究を行っている。他の分野とことなり、優れた研究者であっても患者情報や剖検材料の蓄積がなくては実施不可能な分野なので、他国内外の分野他施設との連携を強化して発展させていく必要がある。 ・①それぞれの研究内容に関しては高く評価するが、どの研究も最終目標がどこにあるのかが明確でない。 ・テロメア長の測定を確立したのは大きな成果なので、今後の広がりが大いに期待できる。ブレインバンクのネットワーク整備でさらなる広がりが必要ならば、他の機関に呼びかけるアクションも必要だ。そういう呼びかけのなかでマスコミを活用すれば、記者の認識も格段に上がるのではと感じた。 ・今後も必要性は高い。 ・テロメアなど面白そうな課題が多数ある。	

5 総合評価	平均4. 53点
・これまでの高齢者診療の積み重ね、リソースバンクやそれを利用した研究は当研究所のみならず、日本の老年医学研究の重要な財産であり、今後も発展させていくべきである。 ・総合してすべての研究においても成果を上げている。 テロメアに関しては多くの疾患を調べるあまり焦点がぼけてしまっていて、最終目標がどこにあるかが明確でない。臨床応用も大切であるが、基本に戻ってテロメアの細胞内の機能研究も必要と考える。 高齢者ブレインバンクは世界的な事業であるからこそ、健康長寿医療センターの役割を明確にして欲しい。 今後、貴重な資料が有用に使われることを期待する。 ・全体として、すばらしい研究を行い、成果をあげている。 ・全て着実な歩みとの印象は受けた。 ・認知症研究の核となっている。5	
6 評価を終えて	
・高齢者ブレインバンクはすごいということは理解したが、むしろ問題点も明らかにして、それを今後どのように克服していくのかという解決策の話も聞きたかった。 日本では倫理的問題で使いにくいのではという質問に対して、それは日本が悪いという回答をしていたが、どうしたら日本でも使えるようになるのかという前向きな回答が欲しかった。 ・テロメアの話は科学的な情報を発信するうえで興味深いため、記者向けにレクチャーが可能なテーマである。テロメアを取りあげるニュースまたは記事は科学面で十分に成立するので、科学担当の記者たちに一度、レクチャーをし、その中で都の研究成果を訴えていけば、もっと一般の人たちに還元できる。 ・研究発表の説明に際し、筆頭やコレスポンデンスがあるものをきちんと説明し、originalityについて明確にされていたことはすばらしい発表であった。	

自然科学系 外部評価委員会 チーム別評定結果

【各5点満点】

●神経画像研究チーム

チームリーダー：石渡喜一

各委員 の評点	1 研究計画の創造性・妥当性	2 研究成果	3 研究成果 の還元	4 今後の展望 と発展性	5 総合評価
平均点	4.4	4.2	4	4.6	4.26
	5点×3名 4点×1名 3点×1名	5点×2名 4点×2名 3点×1名	5点×2名 4点×1名 3点×2名	5点×4名 3点×1名	

5チーム中 3位

評点の理由、コメント

1 研究計画の創造性・妥当性	平均4.4点
・豊富な実績に基づき、画像データベース、認知症発症前から剖検までの追跡調査、新たな診断薬の開発など優れた研究計画となっている。 ・①高齢者の増加にともない脳機能の研究・診断の研究発展が急務であり、このチームの役割は大きい。 ②さまざまな器機の比較やそれらをつなぎ合わせることで脳診断の正確性を得る試みは独創性・新規性・必要性が高い。 ③外部研究費獲得額も多く、病院や他チーム、外部との連携も密である。 ・認知症診断のためのアミロイドイメージングの意義の確立、脳画像データベース構築、あらたな診断薬の確立など実用的な認知症診断に焦点を絞った計画であり、国際的な共同研究の広がりや、実用化を念頭に置いた点、また研究所全体の研究目的と合致している点が評価できる。 ・アミロイドイメージングによる認知症の診断、特に高齢者ブレインバンクと共同して、症状の進行度合と老人斑の関係を視覚で判定できる診断の研究は新規性に富み、素晴らしい。APOE2がアミロイド沈着を抑制しているという研究も注目に値する。足裏への軽い刺激で脳が感知しているというサブリミナル効果の研究も興味深い。 ・新しいリガンド等独創性が高い。	
2 研究成果	平均4.2点
・研究は順調に進展しており、多くの業績を上げている。 ・①最終目標には届かないものの、成果を上げてきている。 ②学会発表・論文投稿も多い。 ・アミロイドイメージングによって、脳内の糖の代謝、認知症の症状の進み具合、薬物治療による脳内の変化などが可視化されるようになり、大きな成果をあげていると思う。画像のデータベースの構築がさらに進めば、認知症の早期診断に結びつく貢献ができるような成果をあげている。 ・今後またさらなる成果が得られると予測されるので4点。 ・画像診断の有効性を解明。	

3 研究成果の還元	平均4点
・実臨床や産業への貢献が大きい。 ・①医学的貢献度が大きく、期待される ②多くの研究者が審議会に参画しており、行政への貢献度が高い ・これだけの成果をあげていながら、やはりニュースになる度合いが少ないのは残念。もっと地域や産業に貢献している様子を広く訴えてもよいのではないか。 ・今後の還元に期待できる。 ・早期診断法の開発に向け努力	
4 今後の展望と発展性	平均4. 6点
・画像データベース、認知症発症前から剖検までの追跡調査など当研究所でなくては実施できないような重要な研究は今後の発展が期待される。 ・①目標に向けて着実な成果を上げている・ ②研究継続の方向性・必要性・妥当性・発展性に問題なし ・アミロイドイメージングのコア施設として、大いに期待できる。アミロイドイメージングの臨床ガイドラインの作成に向けて、大きく貢献できるので、その成果を待ちたい。 ・新たなアルツハイマー病治療薬開発のためにも、より正確な早期診断が必要であり、その意味で今後に期待できる。 ・見込みのない分野の早期撤退は必要。	
5 総合評価	平均4. 26点
・社会の高齢化にともない認知症が増加しており、本部門がおこなっている認知症の早期診断の研究は重要性、緊急性とも高い。新規造影剤の開発に関しては、他の実用化研究同様、商品開発・販売のノウハウを持つ部門を作るか、企業との早期からの連携が必要ではないか。 ・成果を上げており問題なし 研究によって理想的な診断装置を作っても、対費用効果により医療現場で使えないという可能性もでてくると思う。より安価な器機の開発が求められる。 ・認知症の早期発見、PETの診断薬の開発、DNA合成能を指標とするがん診断法の開発など、どれもすぐれた研究で、今後さらに大きな成果が期待できそうだ。 ・全体に臨床と結びついた着実な歩みと判断した。 ・3	
6 評価を終えて	
・これまでに述べたようにアミロイドイメージングの話はニュースになりやすい話題性をもつ。もっと記者レクチャーをすれば、「ええ、こんなに画像診断は進んでいるの！」と思わせるような興味深いニュースになる。自信をもって情報発信してほしい。 ・今後期待したい。	

6 評価を終えて

・研究所への総評

各研究者の努力の成果が見られましたが、これを継続するためには研究所として継続的な支援が必要と考えます

・他の研究グループも含めて全体を通しての要望ですが、発表に際しては、

- ①国内外の先行研究との比較の上でどの位オリジナリティーがあるのか明確にしていきたい。
- ②共同研究も多いので、本研究所で主体に研究しているのか他が主体なのか明確にして頂ければありがたい。

社会科学系(B系)報告

東京都健康長寿医療センター研究所（社会科学系）の外部評価報告について

社会科学系 外部評価委員会
委員長 長田 久雄

東京都健康長寿医療センター研究所における社会科学系は、社会参加と地域保健研究チーム、自立促進と介護予防研究チーム、福祉と生活ケア研究チームの3チームで構成され、研究を行っている。また、社会科学系では新たに東日本大震災被災者支援研究及び4つの長期縦断研究（SONIC 研究、虚弱(frailty)の予防戦術の解明を目的とした長期縦断研究、高齢期の健康と自立の維持と要介護予防のための新たな検診システムの開発研究、都市高齢者の社会・経済・健康格差を乗り越える研究）に取り組んでいる。

このたび、各研究チーム等から事前に提出された研究報告書と当日のプレゼンテーションを基に、研究所が定めた評価項目及び評価視点を基に行った評価を、委員会としてとりまとめたのでここに報告する。

1) 各チームについて

①社会参加と地域保健研究チーム

年度別計画表に記載されている研究内容について概ね順調に進行している。明確な枠組みに基づいて研究と実践が行われており、アクションリサーチ、介入研究、システム構築、提言と、研究と成果の還元が直結するものが多く、その意味で研究成果の還元は着実に行われていると考えられる。本チームの研究テーマは、いずれも社会的要請度の極めて高い、大変重要な研究であり、市区町村、都、国、いずれにおいてもその成果が強く期待されているところである。今後も研究所だからこそ出来る研究として、縦断的な探求や組織的な取り組み、根拠ある対策づくりとその検証などにますます取り組んでほしい。

②自立促進と介護予防研究チーム

全体として、本年度の目標を達成する成果が上がっていると考えられる。また、研究成果の発表も大変多く、研究レベルも高く、高い評価を与えるに値する。本研究チームは、多くのテーマにおいて貴重な実証的研究成果を上げており、いずれの研究も継続することが望まれるが、基礎から実践的応用に至る研究の段階を明確にし、研究を展開することによって、今後一層の発展が期待できると考えられる。東京都のみならず、厚生労働省を始めとする国の期待は大変大きい。本チームの行政・地域施策への貢献は一定以上であると考えているが、「期待度」が極めて高いことを考慮すると、今以上の成果の還元が期待される。

③福祉と生活ケア研究チーム

本年度も着実に研究成果が上がっている。研究目的は重要であり、必要性が高い。他の

研究チーム、臨床部門、外部機関との連携も活発である。いずれの研究テーマも市区町村において大変大きな課題であり、その具体的な対応策が求められている。各テーマの研究が進みつつある状況だと理解されるので、研究成果が社会／行政などの取り組みに活かされるよう期待したい。今後、更に発展が望まれる研究が多数あり、その発展が強く望まれる。

2) 東日本大震災被災者支援研究について

本研究は、東日本大震災被災者支援という極めて重要な内容である。気仙沼市、相馬市などで介護予防やサポーターの養成を行っていることは必要性も高く、これまで研究所が培ってきた成果の活用という意味からも有意義である。さらに、この活動から得られた知見を首都圏の防災に役立てるという視点も評価し得る。本研究継続の方向性は適切であり、その必要性は極めて高く、妥当性も実証されており、発展性が大いに期待される。東京都の被災地支援という枠組みのみならず、今後の災害への備えという意味でも、規模を更に拡大し、発展させることが強く望まれる。

3) 長期縦断研究について

①SONIC 研究

本研究は、超高齢者の健康長寿要因の基礎研究として重要である。研究の目的を達成するために、他の研究機関、チームとの連携も適切に行われている。本研究は、継続的研究の緒についたばかりであり、全体的な目標の達成は将来に待たれるが、着実に本年度の成果は上がっていると評価できる。長期縦断研究の継続により今後、研究成果の還元は大いに期待できる。

②虚弱(frailty)の予防戦術の解明を目的とした研究

本研究は、日本の現在、今後の人口構造を考えると、極めて重要な課題であり、長期縦断研究によって解明しようとする試みは独創性があり貴重である。また、他の機関との連携も行われている。本長期縦断研究は、隔年の悉皆調査、詳細調査を含み、今後重要性が高まると考えられる **late onset disability** の予防に資するものと考えられる。適切に調査が継続されることにより、多くの成果が得られることが期待でき、今後の発展性が認められる。

③高齢期の健康と自立の維持と要介護予防のための新たな検診システムの開発研究

本研究は緒についたばかりであるが、後期高齢者を対象にした適切な検診システムと介入方法が確立することは重要である。本年度は研究の初期であるため、研究成果の還元などは未達成のところがあるが、今後、確実なデータの収集と蓄積による縦断研究の継続によって、大きな成果があがることが期待できる。

④都市高齢者の社会・経済・健康格差を乗り越える研究

本研究において、追跡調査の脱落者に対しても訪問調査で転帰等を明らかにし、自治体との連携によって救済策を検討するという方法は独創的であり、必要かつ有用であると考えられる。研究組織が病院部門も含め、社会科学系全体が包含されたチームとなっており、本センターの社会科学系の総力を結集した研究としてその成果が待たれる。

最後に社会科学系全体の総論を述べる。

全体として目的も明確であり、必要性の高い研究を実施しており、着実な成果が上がっていると考えられる。また、研究所内外の研究者及び病院との連携も適切に行われており、東京都の施策との結びつきも考慮されていると評価できる。今後は、各チーム内、各チーム間、及び長期縦断研究の内容が整理されることを期待したい。ある研究から生まれた成果や課題が、他の研究に活かされるというような研究間の有機的相互関連が高まれば、一層効果的な研究成果が上がるのではないかと考えられる。

本センターに対する社会、研究者、学会など多くの人、機関、更には東京都をはじめとする自治体の期待の大きさは相当なものである。日本における社会科学系老年学の牽引車としての本センターの役割は大変大きいと言える。

社会科学系 外部評価委員会 チーム別評価結果

【各5点満点】

●社会参加と地域保健研究チーム

チームリーダー：新開省二

委員	1 研究計画の創造性・妥当性	2 研究成果	3 研究成果の還元	4 今後の展望と発展性	総合評価
平均	4.2	4	4.2	4.6	4.2

5点×1名

4点×4名

5点×1名

4点×3名

3点×1名

5点×2名

4点×2名

3点×1名

5点×3名

4点×2名

3チーム中2位

評点の理由、コメント

1 研究計画の創造性・妥当性	平均4.2点
・本研究チームのテーマは2つある。社会参加のテーマに関しては、社会参加を社会貢献だけでなく老化と虚弱に着目した介護予防の視点と結びつけていることは有意義であり、必要性が高い研究課題であると考えられる。就労、相互扶助、次世代育成も妥当な研究テーマだと思われる。大都市部における重層的社会参加戦略は、それぞれの活動レベルが有機的に関連づけられれば独創的な成果を生むことが期待される。地域保健のテーマに関しては、介護予防に関する個別の方法は広く研究されていると思われるが、新しい介護予防として「老化」と「虚弱」に着目し、介護予防が地域でうまく機能するための地域保健システムの開発を目指していることの重要性はとくに高いと考えられる。老化関連バイオマーカー、医療経済的分析など未解明な部分もあり研究計画の妥当性を検討することが望ましいテーマもあるが、生活モデルにもとづく虚弱予防プログラムの提案など、地域における実際の活用、展開の観点から有意義と考えられるテーマも多い。 ・社会参加・地域貢献活動が高齢者自身へ与える影響を研究の対象とした着眼点がすばらしい。老化・虚弱を中心に介護予防の機能強化に取り組んでいる。 ・テーマ1. 社会参加・社会貢献の促進に関する研究では、そのテーマの意義・目的が明確に記載されている。同一地域における「戦略的」取り組みが特徴として記載されており、それぞれのプログラムが関連し、「社会参加システムの構築」を目的として行われていることが伺えた。その研究計画は他の研究機関ではあまり取り組まれておらず、独創性・新規性は高い。 ・テーマ2. 老化・虚弱の一次予防と地域保健に関する研究では、血清βミクログロブリンの研究は独自の研究都市定義があるが、早期に老化における意義を明確にすることが求められる。その他のいずれの研究の目標も妥当であり、必要性も高いと考える。 ・今後の超高齢社会に向けて、必要性の高い内容だと思う。データベースの整備、よく言われていることのエビデンスをきちんと示していくことは重要だ。 ・高齢社会進行の中で重要なテーマを取り上げ、連携を図りながら推進している。	

2 研究成果	平均4点
・一部に研究途中であり成果が未確立な研究もあるが、全体として着実に研究成果が上がっていると認められる。東京都への還元を考慮して、大都市部における重層的な社会参加戦略は着実な成果が上がっている。たとえば、生きがい就労支援システムの追跡調査、大田区における成功事例、認知期への介入の長期効果などは、学術的に裏付けられた社会還元に結びつく有意義な研究成果と考えられる。その意味で、目標は着実に達成されていることが認められる。学術的にも、学会・論文発表が十分行われている。 ・地域包括的見守りシステム、地域包括支援システムに焦点を当てたこと。新たな地域包括的介護予防推進システムの提案。 ・年度別計画表に記載されている研究内容については、概ね順調に進行していると考えられる。テーマ1、2いずれも一定以上の研究成果を発表しており、その学術的知見は高く評価される。研究成果としてまとめることが難しい領域ではあり、単純に論文数で判断することは妥当ではないが、「地域包括的見守りシステム」の構築等、社会的意義も高く、成果の早い発表が望まれる。テーマ2では特にシステム構築を掲げており、一般化できるシステムとしての検証結果の発表が待たれる。 ・世代間交流型学校支援ボランティア活動、社会的孤立に関する重層的な取り組み、介護予防推進システムを応用した地域介入研究など、メディアとしても大変興味深い成果を挙げていると感じた(Nが十分なのかよく分らなかったが)。一方で、老化の新たな指標開発や医療経済分析などは、現状では思うような成果が出ていない点も留意した。 ・社会参加に関わる尺度開発や、介入プログラムの作成とその効果検証など成果がみられている。研究成果発表は積極的に行われている。	
3 研究成果の還元	平均4.2点
・本研究チームにおいては、明確な枠組みに基づいて研究と実践が行われており、アクションリサーチ、介入研究、システム構築、提言と、研究と成果の還元が直結するものが多く、その意味で研究成果の還元は着実に行われていると考えられる。大田区における成功事例のように、研究の実施そのものが地域還元となっている場合もあるが、今後は、普遍的な介入法、プログラムあるいはシステムの構築とともに、地域等対象の特性を考慮し、それに合わせカスタマイズされた介入法、プログラムあるいはシステムの開発を可能にするような研究成果の体系化を行うことにより、社会的還元の可能性や実効性が高まることが期待される。 ・都内大田区等におけるフィールドワーク。介護保険サービス利用者の抑制。 ・東京都健康長寿医療センターの成果に対する期待は、東京都・東京都民のみならず、全国の自治体、研究者からも極めて大きいことは言うまでもない。本チームの行政・地域施策への貢献は大変大きいことと考えるが、「期待度」も同時に大変大きい点からは、今以上の成果の還元が期待される。特に、ある市町村で成功した事例が他の市町村でも適用できるかといった汎用性のある提言につながっているかという点で、更なる貢献を望みたい。なお、チームリーダーは国の委員等もしており、行政への提言、貢献は大変大きく、今後も大いに期待できる。 ・高齢者ボランティア活動支援のガイドラインや研修プログラム、社会的孤立の対策としての啓発用小冊子、見守りポイントチェックシートなどの作成は、地域社会・行政への成果の還元として意義があると思う。より広く活用してもらえるような工夫を期待したい。 ・ガイドラインの作成や、対策への提示がなされている。	

●社会参加と地域保健研究チーム

4 今後の展望と発展性	平均4.6点
・本チームの研究は、中期目標の達成に向けて、着実に研究が進められていると評価できる。現時点では、長期的な研究目標が未達成なテーマもあるが、方向性や本年度の研究内容は妥当であり、必要性が高い。今後は、各テーマを有機的、力動的に関連づけた鳥瞰的視点からの整理が望まれる。そうすることによって、研究テーマ間の相乗効果が期待できる。加えて、研究成果の有効性を検証、精査して無駄を省くと共に、それぞれの研究のステージを見極め、各研究に重みづけすることを考慮することも望まれる。 ・大都市型モデルを期待する。地方都市では有効に機能している。 ・一部の研究については、年度計画に十分対応できていない計画はあると考えられたが、中期目標の達成は可能であると判断された。 ほとんどの研究はその方向性は適切であり、その必要性も強く感じられた。 社会参加・社会貢献は、特に、その発展性が期待される領域であり、今後も日本の老年学をリードしていく可能性を秘めている。 ・東京都など首都圏で急速な高齢化を迎える中、男性やホワイトカラー層の高齢化に対応した社会参加支援の仕組みは大変重要で意義があると思う。成果を期待したい。 ・時代による高齢者の社会参加の実態をとらえ、今後の見通しを図ることは重要である。	

評点の理由、コメント

●社会参加と地域保健研究チーム

5 総合評価

平均4.2点

・本チームは、一部に未達成なテーマがあるものの、全体として本年度の計画に沿って研究が行われ成果があげられ、社会的還元も行われている。介護予防、社会貢献、就労、相互扶助、次世代育成というテーマ設定も妥当かつ有意義であり、研究方法も、介入研究、縦断研究、コホート内CRT研究、アクションリサーチなど、研究テーマに適した方法が採用されている。研究成果は、一部を除き確実にあがっており、それらは学会発表および論文として学術的に公表されている。研究成果の還元には様々な方法があるが、介入研究やアクションリサーチは、研究自体に社会的影響があり、当該地域においては社会的還元という意義を有していると考えられる。今後は、本チームの研究間の関連を明確にし、有機的に統合することや、研究成果を精査し、研究テーマの比重を考慮すること、あるいは、実現可能性を考慮した研究計画を立案することなどが望まれる部分もあるが、チーム全体としては、今後の継続によって発展的な成果や社会的効果が期待できる。

・これまでの研究の検証と併せ、高齢者の社会参加と地域貢献の再評価を示した。大きな飛躍ではないが、地道な取組であり、住民の信頼や研究所の評価を上げる要素を含んでいる。

・本チームにおける研究テーマである「社会参加・社会貢献の促進に関する研究」・「老化・虚弱の一次予防と地域保健に関する研究」は、いずれも社会的要請度の極めて高い、大変重要な研究であり市区町村、都、国、いずれにおいても、その成果が強く期待されているところであることに異論はないと考える。

両研究テーマについて多くの個別研究があるが、いずれも両チームリーダーの卓越した指導力で、順調に研究は進行していると考えられた。しかし、ごく一部の研究では、その速やかな進捗が望まれる研究もあった。

しかし、単年度で業績を上げることが極めて難しいと考えられる本研究領域で優れた成果をコンスタントに出していることは高い評価に値する。

・項目ごとに進捗や成果が違うので、全体を評価するのは難しいが、私の立場では、特に「社会参加・社会貢献の促進」の研究テーマ、内容、成果について、私たち一般市民も知っていただけないのではないかと感じた。メディア的にも、記事として紹介できるのではないかなと思うものもあり、市民全体への還元としても紹介していくべきではないだろうか。

・4 全国規模の縦断研究は重要である。時代背景を含め関連要因の分析をすすめ、今後の時代変化により起こることへの予測と対策への提言を行えるようにしてほしい。高齢者ボランティア、高齢者就労を促進する方策、孤立予防などいずれも重要課題である。対策の効果検証も行ってほしい。モデル地域における継続的な働きかけと成果を示していることは意義がある。その成果をモデル地域から全国へどのように適用、導入できるのか引き続き検討してほしい。

6 評価を終えて

・高齢者の世代間交流型学校支援ボランティア活動、屋内見守りセンサーを用いた孤立の三次予防策の取り組みなど、取材したい内容が多かった。

・研究所だからこそできるテーマと研究として、縦断的な探求や組織的な取り組み、根拠ある対策づくりとその検証などにますます取り組んでほしい。

社会科学系 外部評価委員会 チーム別評価結果

【各5点満点】

●自立促進と介護予防研究チーム

チームリーダー：栗田主一

委員	1 研究計画の創造性・妥当性	2 研究成果	3 研究成果の還元	4 今後の展望と発展性	総合評価
平均	4.4	4.6	4	4.4	4.33

5点×2名
4点×3名

5点×3名
4点×2名

5点×1名
4点×3名
3点×1名

5点×3名
4点×1名
3点×1名

3チーム中1位

評点の理由、コメント

1 研究計画の創造性・妥当性	平均4.4点
・本チームでは、筋骨格系の老化予防の促進、介護予防の促進、認知症・うつ予防と介入の促進という3つのテーマが設定されているが、いずれのテーマも必要性の高いものと考えられる。サルコペニア、膝痛、虚弱、転倒、尿失禁、口腔機能低下、認知症、うつ、精神的健康度の低下は、いずれも高齢者における重要な課題であり、要因の解明と効果的な予防プログラムの開発は必要性が高い。他の研究チームや病院、外部機関との連携も活発に行われており、全体として研究計画の妥当性が認められる。 ・多くの高齢者が日常的に困っている事柄の解決に向け科学的にアプローチしている。確実に成果の期待できる研究である。 ・チームの研究知見から政策的な提言を行うというチーム研究の目的と意義は明確になっている。テーマ「筋骨格系の老化予防の促進」はその必要性の極めて高い研究内容であり、さらにその研究方法も着実にありながら独創性を有している。テーマ「介護予防の推進」はもとより新規性を発揮しにくい分野であるが、アウトカム設定などに独自性も見られる。 テーマ「認知症・うつ予防と介入の促進」は、国としても喫緊の課題であり、研究としての必要性、重大性は極めて高く、個別の研究計画も、他の研究機関ではできないような内容となっており、高い独自性も伺える。 全体として、研究の目標は妥当であると考えられる。 ・研究全体の目的と意義、関連性が明快で、分かりやすい。介護予防、認知症予防・初期支援など、超高齢社会に向けて大変必要性が高く、実際の地域の活動に直接役立つ内容だと感じた。 ・自立促進、介護予防介入プログラムの効果測定からエビデンスある方法論を解明。認知機能低下抑制、認知症早期発見・対応は重要テーマである。	

●自立促進と介護予防研究チーム

2 研究成果	平均4.6点
・尿失禁予防プログラムの普及活動の効果評価や老年症候群の複数徴候改善のための介入研究のように、今後の更なる成果を待つテーマもあるが、全体として本年度の目標を達成する成果があがっていると考えられる。効果的口腔機能向上サービス提供法の考案、認知症高齢者の接触・嚥下障害支援システム考案、千代田プロジェクト、認知症の医療資源整備と地域連携推進など、学術的に貴重な知見だけでなく、実践的応用が可能な知見も得られている。学会発表、論文発表も充実していると評価できる。 ・筋骨格系老化予防プログラム、尿失禁改善プログラム等各種プログラムの開発。口腔機能向上サービス提供法は国制度に導入された。認知症アセスメントシート、DASC開発。 ・年度別計画表に記載されている研究内容については、順調に進行していると考ええる。また、研究成果の発表も大変多く、研究レベルも高く、高い評価を与えるに値する。さらに、今回の東日本大震災を受けて開始された「災害時の認知症医療・ケアの課題」については、精力的に取り組まれ、その報告書を速やかに作成し、さらに、発展させていることは特筆に値する。 ・学術的にも評価が高いようだが、メディア的にも社会的にも興味深い成果を挙げていると思う。転倒予防ガイドライン、認知症高齢者の食支援プログラム、地域包括ケアシステムでの認知症アセスメントシートなどの開発など、社会的に意義があると感じた。 ・目標に沿った成果が得られ、公表されている。最優秀論文賞受賞した研究がある。	
3 研究成果の還元	平均4点
・地域活動の支援につながった研究、研究の実践が介護予防活動として定着した研究、国の介護予防事業マニュアルに反映された研究、国の新規事業に活用された研究など、研究成果の還元も積極的に行われているが、本年度の時点では、普及とその成果の検証に至っていないテーマもある。基礎研究の成果は確実に蓄積されていると考えられるので、今後は一層、普及および普及法、実践的指標の開発など、研究の一層の社会的還元が望まれる。 ・未返送後期高齢者訪問調査は画期的。千代田区において実践される予定。 ・東京都のみならず、厚生労働省を始め国の貴センターの成果に対する期待は大変大きい。本チームの行政・地域施策への貢献は一定以上あると考えるが、「期待度」が極めて高いことを考慮すると、今以上の成果の還元が期待される。特に、「うつ予防」に関しては、市区町村において大変大きな問題であるが、残念ながら、その取り組みは十分であるとは言い難く、その具体的な対応策が求められている。 ・埼玉県ふじみ野市や文京区、千代田区など、研究成果が地域の実際の事業に取り入れられている。また、運動の習慣化の介入プログラムが国の介護予防事業マニュアルに反映されたほか、国が新たに組み込む認知症初期集中支援チームの運用や研修資材を開発するなど、研究成果が国の施策にも貢献している。 ・成果の還元がなされている。さらに普及に努められるとよい。	

●自立促進と介護予防研究チーム

4 今後の展望と発展性	平均4. 4点
・本研究チームは、多くのテーマにおいて貴重な実証的研究成果を上げている。いずれの研究も継続することが望まれるが、基礎から実践的応用に至る研究の段階を明確し研究を展開することにより、今後一層の発展が期待できると考えられる。社会科学系の研究は、基礎的研究成果も不可欠かつ重要であるが、実践的応用が求められるテーマが多い。研究内容によっては、このことをより意識して研究を進めることが望まれる。 ・DASCの実践を多くの区市町村へ導入。地域の特性にあった認知症プログラムを考えていくプロセスの重要性を発信すべき。 ・年度計画以上の対応をしており、限られた人員体制の中でも、中期目標の達成は可能であると判断された。ほとんどの研究はその方向性は適切であり、必要性も感じられた。研究内容は妥当であり、発展が強く望まれるものばかりであり、日本の老年学を学問的に牽引するばかりでなく、政策提言としての価値も強く期待される。 ・要介護状態になるのを予防する、遅らせることは今後の日本の超高齢化を考えると非常に重要な問題。身体的な対応、食生活支援、特に課題となっている認知症の初期からの支援体制づくり等に役立つ研究だと思う。 ・今後さらに、組織的で効果ある方法論も求められてくるのではないかな。	
5 総合評価	平均4. 33点
・本研究チームは、サルコペニア、膝痛、虚弱、転倒、尿失禁、口腔機能低下、認知症、うつ、精神的健康度の低下という高齢者の重要な課題に関して要因の解明と効果的な予防プログラムの開発を目指している。各テーマは確実に貴重な基礎的研究成果をあげているが、こうした研究成果から得られた知見を総合し、提言や社会システムを創出することを目指しているという観点からは、今後、具体的かつ実践的な普及策の提案や普及プログラムの策定、提言などへと研究を進めることが求められよう。 ・研究成果の着実な積み重ねはあるが、広く普及することが必要である。 ・本「自立促進と介護予防」チームにおける研究テーマである「筋骨格系の老化予防の促進」・「介護予防の推進」・「認知症・うつの予防と介入の促進」は、いずれも市区町村、都、国など社会的要請度の極めて高く、その成果の還元を強く期待されている大変重要な研究である。チームリーダーと両テーマリーダーの指導力・学術的生産性は定評があり、研究テーマについて多くの個別研究がある中で、順調に研究は進行していると考えられた。しかし、個別の研究テーマが多岐にわたり、それらを統合的に位置づけ、研究をさらに発展させていく必要が若干感じられた。 ・大変緻密な研究とその成果を積み上げて、各テーマにおける効果的な予防プログラムを開発しようという取り組みがよく分かった。 ・4 各テーマ、目的に沿って成果が見出されている。調査未返送者へのフォローなど、よりニーズの高さが予想される対象への追跡は重要である。認知症疾患医療センターの機能評価と、全国的に国民の間でも根付く体制づくりへとさらに貢献してほしい。	
6 評価を終えて	
・千代田プロジェクト、認知症の食支援プログラム、転倒予防プログラムなど、取材したいテーマがいくつもありました。 ・老化予防と介護予防を連携させることで、さらに組織的な働きかけや総合的な生活の質改善につながる方法論の探求ができるのではないかな。	

社会科学系 外部評価委員会 チーム別評定結果

【各5点満点】

●福祉と生活ケア研究チーム

チームリーダー：石崎達郎

委員	1 研究計画の創造性・妥当性	2 研究成果	3 研究成果の還元	4 今後の展望と発展性	総合評価
平均	4.2	3.8	3.6	3.8	3.8

5点×2名

4点×2名

3点×1名

5点×1名

4点×3名

2点×1名

5点×1名

4点×1名

3点×3名

5点×1名

4点×3名

2点×1名

3チーム中3位

評点の理由、コメント

1 研究計画の創造性・妥当性	平均4.2点
・本チームは、高齢者の地域生活支援に資することを全体の目的として、在宅生活の支援方法の提案、地域包括ケア体制確立施策への示唆・助言、看取りケアのあり方のモデルの提供を目標としている。研究目標は重要であり必要性が高い。他の研究チーム、臨床部門、外部機関との連携も活発である。 ・研究の切り口は独創的であり、日常的に高齢者の支援に役立つものである。 ・Lawtonのサクセスフル・エイジングの考え方を柱に、研究の目的を整理している点は大変良い発想である。3つのテーマの研究それぞれがどの領域(分野)に位置づけられるかを意識して研究内容を評価すると、その独自性・新規性・必要性は一定以上にあることがわかる。特に、病院部門等との連携を意識した研究内容からは、特にその独創性と優位性を見ることができる。全体として、研究の目標は妥当であると考ええる。 ・研究目標があまりにも大きくて少し捉えどころがない一方で、チャレンジングな取り組みでもあったと感じた。 ・「在宅療養支援方法の開発」では、研究計画と発表された内容との一貫性がわかりにくい。研究費も多く成果を期待する。要介護化の要因解明と予測は新規性ある、重要テーマである。	

●福祉と生活ケア研究チーム

2 研究成果	平均3. 8点
・研究成果はあがっているが、中期計画に対する研究項目と年度別計画として掲げられている内容と、本年度の内容とが一致していないテーマがあり、報告された研究成果は貴重な内容であるが、中期計画の枠組みからは本年度の研究としての妥当性に疑問が残った。新しい学術的知見も得られており、研究成果は多数の学会発表、論文発表として公表されている。 ・METsについて、発展途上の感が否めない。ライフストーリープロジェクト、ライフデザインノートともにインパクトが弱い。 ・年度別計画表に記載されている研究内容については、順調に進行していると考ええる。学術的な知見のレベルは十分高く、その成果としての学術論文の発表も一定以上ある。なお、「終末期ケアのあり方」など一部の研究について、その学術的価値は高いが、まだ、成果物となっていないものがあり、可能な範囲での早急な成果発表が望まれる。 ・「Mets」の取り組みは興味深いが、説明がよく分からなかった(ついていけなかった)。それを貯めてどうしたらいいと考えているのかなど、研究と今後の社会への広がり、展望も聞きたかった。実施する人のモチベーションにつながらと思うので意義は大きいと考える。また、ライフデザインノートの製作について、最近是这样したものが大変多く市販もされているが、先行しているノートとの違いや意義について説明がほしかった。渡す時期の問題もあるだろうが、私だったら何冊もこうしたノートを持つより1つにしたいので、金銭のことをどうしたいかも書ける方がいいのではないかと考えるが、そこはどう考えたのか。 ・経年的変化から介護保険認定未申請やサービス未利用などの潜在的ニーズが抽出された。死亡前、医療費・介護費の年齢による影響など新たな知見が見いだされた。	
3 研究成果の還元	平均3. 6点
・本チームでは、有疾患患者の老年症候群対策、区市町村による虐待支援、要介護状態の重度化、介護者の心身の健康保持、在宅継続困難等に係わる要因の解明、介護保険制度の評価などにおいて、自治体の事業計画の策定や提言、助言などを積極的に行っていることは評価できる。また、研究協力者や一般市民に対して、様々な機会に研究成果の還元を行う努力をしていることが認められる。 ・期待感が強い分野であり、『介護予防』『筋トレ』のような画期的な成果を望みます。 ・行政、特に、東京都は言うまでもなく、厚生労働省を始め国の貴研究所の成果に対する期待は極めて大きい。本チームからは特に病院等医療機関との連携に基づく研究成果もあり、貴重な、意義深い研究成果が多数出されているが、行政・地域・産業等の施策への貢献・反映という点からはやや物足りない。特に、いずれの研究テーマも、市区町村において大変大きな問題であり、その具体的な対応策が求められている。「終末期ケアのあり方の研究」は、貴センターにおいて本チームのみしかないが、その成果の還元が強く求められる内容であり、更なる速やかな還元を求めたい。 ・各テーマの研究が進みつつある状況だと理解した。研究成果を社会／行政などの取り組みに活かされるよう期待したい。 ・認知症高齢者と家族のライフストーリープロジェクトなど研究としての興味深さがあるが、その他の研究も含め成果の還元があまり伝わってこない。	

●福祉と生活ケア研究チーム

4 今後の展望と発展性	平均3.8点
・本年度の報告の内容に限れば、当初の中期計画に対する研究項目と年度別計画に掲げられている本年度の研究テーマと必ずしも一致しない研究がみられた。今後は、成果が得られ目標が達成された研究、継続すべき研究、新たな枠組みに従って進める必要のある研究などを検討し整理する必要があると考えられる。また、チーム全体として研究テーマの相互関連や統合も望まれる。ただし本年度、報告された研究課題は重要であり、今後新たな発展が期待できる。 ・今後の発展性が見えませんでした。 ・年度計画以上の対応をしており、限られた人員体制の中でも、中期目標の達成は可能であると判断された。いずれの研究はその方向性は適切であり、必要性も強く感じられた。今後、さらに発展が望まれる研究が多数あり、その発展が強く望まれる。 ・Metsの取り組みなど、社会への広がりがあれば、意味も大きいと思う。また、個人的には、認知症の夫婦のライフストーリープロジェクトに期待している。ケアする側に役立つだけでなく、ご本人たちの気持ちの整理にもなり、また、私たち一般の人間の理解にもつながる形に研究成果を昇華させてほしい。 ・要介護化に関わる社会的要因分析、医療費・介護費への影響要因分析を政策につなげるように進めてほしい。ライフデザインノートの普及は、事前指示とのちがいを明確にして検討する必要がある。	
5 総合評価	平均3.8点
・本チームの研究テーマは重要なものであり、本年度も着実に研究成果があがっている。他機関等との連携、研究成果の発表、研究成果の社会還元も活発である。本年度の研究の中に、当初中期計画に掲げられた本年度の計画内容との対応が不明瞭なテーマがあったので、中期計画に沿って進めるのであれば、今後は計画の枠組みを見直す必要があると考えられる。また、各テーマが、本チームの研究としてどのように関連づけられ統合されるかも、一層明確にすることが望まれる。 ・研究者の皆様の努力は充分であると思います。普及、講演活動のより一層の充実を期待します。 ・本「福祉と生活ケア研究チーム」における研究テーマである「在宅療養支援方法の開発」・「要介護予防の要因解明と予測」・「終末期ケアのあり方の研究」は、いずれも市区町村、都、国など社会的要請度の極めて高く、その成果の還元を強く期待されている大変重要な研究である。研究テーマについて多くの個別研究がある中で、順調に研究は進行していると考えられた。「要介護予防の要因解明と予測」においては、高い研究レベルであり評価されるが、どのように社会に還元するのか、「要介護化の要因解明と予測」は、その研究として極めて意義深いとその還元を進めてほしい。「終末期ケアのあり方の研究」は、大変興味深い研究成果が得られてきており、更なる発展のために何が必要であるかを十分検討し、この領域のモデルとなる研究成果を期待したい。 ・それぞれ、具体的な取り組みをしており、今後の成果に期待したい。 ・4. 在宅療養支援の虐待防止はどのようになったのか不明である。介護保険に関わる潜在的ニーズの掘り起こしは、制度のあり方検討に不可欠で重要なものである。医療・介護資源消費の実態把握を多角的に行い、将来見通しにより制度のあり方を提言してほしい。	
6 評価を終えて	

社会科学系 外部評価委員会 評価結果

【各5点満点】

●東日本大震災被災者支援研究

リーダー：高橋龍太郎

委員	1 研究計画の創造性・妥当性	2 研究成果	3 研究成果の還元	4 今後の展望と発展性	総合評価
平均	4.6	4.8	4.6	4.4	4.63
	5点×3名 4点×2名	5点×4名 4点×1名	5点×3名 4点×2名	5点×3名 4点×1名 3点×1名	

評点の理由、コメント

1 研究計画の創造性・妥当性	平均4.6点
・本研究は、東日本大震災被災者支援という極めて重要な内容である。気仙沼市、相馬市などで、介護予防やサポーターの養成を行っていることは必要性も高く、これまで研究所が培ってきた成果の活用という意味からも有意義である。さらに、この活動から得られた知見を首都圏の防災に役立てるという視点も評価し得る。他の団体とも連携も行われている。 ・成果、効果の直ちに見える研究である。 ・研究内容の独創性・新規性は高く、必要性は極めて高い。 ・被災地で取り組むことは、何をおいても重要だと考える。	
2 研究成果	平均4.8点
・研究所の特性を活かした活動で、成果もあがっていると評価できる。今後は、様々な活動が継続、拡大することを期待している。また、本研究は実践的支援を行うことそのものが成果といえるが、首都圏防災に役立てるという観点からは、報告書や学会等として成果の公表が積極的に行われることが期待される。 ・多くの機関、行政と連携できるということが大いなる成果であると思う。 ・目標の達成度は高く、学術的な知見も十分得られ、成果の発表もされている。	
3 研究成果の還元	平均4.6点
・福祉サービス復旧を担う専門職及びサポーターへの支援、住民を主体とする介護予防体操普及及びサポーター養成講座の開催、仮設住宅居住高齢者に対する介護予防講座など、実践活動が研究成果の還元となっていると考えられる。今後は、普及の拡大と継続、首都圏防災に資する知見の集積が期待される。 ・相馬市、気仙沼市と東京都の信頼関係の強化 ・行政・地域への施策への貢献・反映はすでになされている。	

●東日本大震災被災者支援研究

4 今後の展望と発展性	平均4. 4点
・東日本大震災の被災者に対しては、継続的な支援が不可欠と考えられる。本研究の発展は、これに資すると思える。また、首都圏の防災は極めて重要な課題であり、それに資する知見が得られ、活用に向けて分析検討され、公表されることが期待される。 ・被災地の支援とともに東京が被災した際の研究も望みます。 ・中期目標の達成に向けた研究の方向性は適切であり、その内容も妥当である。本研究継続の方向性は適切であり、その必要性は極めて高く、妥当性も実証されており、発展性が大いに期待される。東京都の被災地支援という枠組みのみならず、今後の災害への備えという意味でも、規模もさらに拡大し、発展させることが強く望まれる。 ・地域を超え、都市部における課題対策につなげてほしい。	
5 総合評価	平均4. 63点
・東日本大震災の被災者に対する支援は、重要な課題であり、本研究は意義があるものと考えられる。研究所のこれまでの研究成果に基づき、様々な支援活動が行われていると評価できる。今後は、活動の継続、拡大、住民による自主活動に向けた支援などを発展させ、さらには首都圏の防災における高齢者支援に役立つ知見を得、それを活用する方向で研究が進められることが期待される。 ・引き続き、地道な研究活動をお願いします。 ・東日本大震災後、さまざまな「災害研究」がなされているが、本研究の質は高く、規模を拡大し、センターが主体となって、大規模に実施されることが強く望まれる。本センターの目玉の研究となってもしかるべき研究であると考え。 ・4. 社会的意義、重要性が高いものである。具体的支援活動の普及と、支援を分析し支援の方法論を提示していくことも、研究所の役割として重要ではないか。	
6 評価を終えて	
・上述の通り、規模を拡大し、センターとして実施すべき研究と考える。 ・緊急性高いテーマであり、上記5からも、実施、研究体制をさらに充実する必要があるのではないか。	

社会科学系 外部評価委員会 評価結果

【各5点満点】

●SONIC研究

リーダー：高橋龍太郎

委員	1 研究計画の創造性・妥当性	2 研究成果	3 研究成果の還元	4 今後の展望と発展性	総合評価
平均	4.4	4	3.4	4.2	3.9
	5点×2名 4点×3名	5点×1名 4点×3名 3点×1名	4点×2名 3点×3名	5点×2名 4点×2名 3点×1名	

4テーマ中2位

評点の理由、コメント

1 研究計画の創造性・妥当性	平均4.4点
・本研究は、超高齢者の健康長寿要因の基礎研究として重要である。研究の目的を達成するために、他の研究機関、チームとの連携も適切に行われている。測定変数も身体、心理、社会と総合的であり、貴重な知見が得られることが期待される。 ・これまであまり触れられてこなかった健康長寿要因の研究に新たな視点から切り込んでいただきたい。 ・研究内容の独創性・新規性は高く、必要性は極めて高い。	
2 研究成果	平均4点
・本研究は、縦断的研究の緒についたばかりであり、全体的な目標の達成は将来に待たれるが、本年度の調査が予定通り実施されつつあること、これまでの研究結果から、70歳、80歳コホートの医学的特徴が明らかにされていること、MoCA-Jという認知機能評価ツールの利用価値が検討されていることなど、着実に本年度の成果はあがっていると評価できる。 ・高齢者が日常的に役立つ身近な情報の発信を期待する。 ・目標の達成度は高く、学術的な知見も十分得られ、成果が今後さらに発表されることが期待される。	
3 研究成果の還元	平均3.4点
・縦断的研究が、ある程度進行した時点に至らないと本研究成果の社会的還元は困難であると考えられる。長期縦断研究の継続により今後、研究成果の還元は大いに期待できるが、現時点は研究の初期段階でデータ集積の基礎の段階であるため、表記のような評価となった。 ・今後期待する。 ・行政・地域への施策への貢献・反映は今後さらにされることが期待される。 ・こうした研究は長期に続けることが大切だと理解している。	

4 今後の展望と発展性	平均4. 2点
・研究計画によれば、本研究は2020年までと、今後長期に縦断研究が継続することになっている。その意味からは、本年度は、計画された対象への調査が確実に行われることが重要であり、得られたデータが確実に将来の調査と結びつけられることが不可欠であるが、本研究は、研究所のこれまでの実績を基に、適切に研究が進められる、独創性の高い貴重な知見が得られることが期待できる。 ・今後期待する。 ・中期目標の達成に向けた研究の方向性は適切であり、その内容も妥当である。 本研究継続の方向性は適切であり、その必要性は極めて高く、妥当性もあり、発展性が大いに期待される。	
5 総合評価	平均3. 9点
・本研究は、70歳以上を対象とし、10年間を想定した長期縦断研究である。日本の年齢構造から高齢者の中でも重要となる対象を選定し、身体、心理、社会の多角的な側面から健康長寿要因の解明を目指した独創性の高い貴重な研究と考えられる。現在は緒についたばかりで成果や成果の公表、還元は今後に待たれるが、調査と分析が確実に行われることにより大きな成果が期待できる。 ・期待値は大きい。 ・極めて意義がある研究で、本センターが中心となって、多研究機関と協力することで多次元的な研究成果を期待できる領域であり、本センターの指導的役割が大いに期待される。 かつての東京都老人総合研究所の「百寿者研究」をしのぐ、本センターの看板としての評価になる研究となってもしかるべき研究であると考ええる。 ・調査を続け、蓄積していくことに意味があるのでしょう。 ・4. 長寿社会における重要な研究である。	
6 評価を終えて	
・上述の通り、センターとして強力に推進すべき研究と考える。	

社会科学系 外部評価委員会 評価結果

【各5点満点】

●虚弱(frailty)の予防戦術の解明を目的とした研究

リーダー：新開省二

委員	1 研究計画の創造性・妥当性	2 研究成果	3 研究成果の還元	4 今後の展望と発展性	総合評価
平均	4.4	4.2	3.4	4.2	3.96
	5点×2名 4点×3名	5点×1名 4点×4名	4点×2名 3点×3名	5点×1名 4点×4名	

4テーマ中1位

評点の理由、コメント

1 研究計画の創造性・妥当性	平均4.4点
・本研究は、長期縦断研究により虚弱の成因と予後を解明し、生活モデル型虚弱改善プログラムを開発し、加齢による心身機能の低下が主因と考えられる虚弱の予防戦略を立案することを目的としている。日本の現在、今後の人口構造を考えると、極めて重要な課題であり、長期縦断研究によって解明しようとする試みは独創性があり貴重である。他の機関との連携も行われている。 ・時間と労力、自治体の協力、連携する大学等どこでもできる研究ではない。 ・本研究内容はチーム研究とオーバーラップしており、独創性・新規性はやや低い、必要性は極めて高い。 ・目的と意義がおもしろい。必要性がとても高いと思う。 ・長年のデータ蓄積を縦断的に解析し虚弱の予測因子を抽出している。	
2 研究成果	平均4.2点
・長期縦断研究が緒についたばかりであるが、すでに10年の研究経過のある草津町での研究やもう一つの調査対象地域である鳩山町の研究から、比較的長期の観察期間のデータに基づく成果があがり、InBodyの測定の妥当性の検証などが行われ、一部は学術雑誌に発表されている。本年度が、長期縦断研究の初期の年度であることを考えれば、加齢黄斑変性のデータや対象者のDNA精製保存も貴重な成果といえよう。 ・総死亡リスクとして数値化 ・目標の達成度は高く、学術的な知見も十分得られ、成果が今後さらに発表されることが期待される。	
3 研究成果の還元	平均3.4点
・本年度は、長期縦断研究の初期であり、成果を行政・地域・産業等の施策に反映するには至っていないため、評価に該当しないと考えられる。長期縦断研究の継続により今後、研究成果の還元は大いに期待できるが、現時点は研究の初期段階でデータ集積の基礎の段階であるため、表記のような評価となった ・具体的な成果還元を期待します。 ・行政・地域への施策への貢献・反映は今後さらにされることが期待される。	

●**虚弱(frailty)の予防戦術の解明を目的とした研究**

4 今後の展望と発展性	平均4. 2点
・本縦断研究は、隔年の悉皆調査、詳細調査を含み、今後重要性が高まると考えられるlate onset disabilityの予防に資するものと考えられる。適切に調査が継続されることにより多くの成果が得られることが期待でき、今後の発展性が認められる。 ・地道な研究の成果を東京の福祉医療施策にも生かしていただきたい。 ・中期目標の達成に向けた研究の方向性は適切であり、その内容も妥当である。本研究の必要性は高く、妥当性もあり、発展性も期待されるが、本研究の方向性の評価はチーム研究との棲み分けにあると考える。 ・虚弱に着目した効果的な介護予防策の提案を期待したい。	
5 総合評価	平均3. 96点
・本研究は、今後、重要性が高まると考えられるlate onset disabilityの成因や予後、関連要因を、長期縦断的に研究するという目的と方法で行われており、研究の継続によって多くの成果が得られることが期待できる。鳩山コホートは応答率が極めて高く、貴重なデータと考えられる。 ・多くの成果を期待する。 ・意義がある研究であり、研究成果を期待できる領域であるが、チーム研究との棲み分けがこの研究の評価になると考える。 ・4. 研究所のこれまでの知見、実績を集結した上で探求している。	
6 評価を終えて	
・上述の通り、センターとして推進すべき研究と考える。	

社会科学系 外部評価委員会 評価結果

【各5点満点】

●高齢期の健康と自立の維持と要介護予防のための新たな検診システムの開発研究

リーダー：吉田英世

委員	1 研究計画の創造性・妥当性	2 研究成果	3 研究成果の還元	4 今後の展望と発展性	総合評価
平均	4	3.8	3	4	3.6

5点×1名	5点×1名	4点×1名	5点×1名
4点×3名	4点×2名	3点×3名	4点×3名
3点×1名	3点×2名	2点×1名	3点×1名

4テーマ中3位

評点の理由、コメント

1 研究計画の創造性・妥当性	平均4点
・本研究は、後期高齢者の健康と自立の維持および老年症候群を予防するための新たな検診システムの開発と、それによりスクリーニングされたハイリスク高齢者に対する介入プログラムの効率的運用を目的としている。長期縦断研究は緒についたばかりであるが、後期高齢者を対象にした適切な検診システムと介入方法が確立することは重要である。他の研究機関との連携も行われている。 ・近い将来、成果の出そうな研究である。 ・本研究内容はチーム研究とオーバーラップしており、独創性・新規性はやや低いが、必要性は極めて高い。	
2 研究成果	平均3.8点
・板橋区の2011年コホートの追跡結果から、超音波画像による大腿筋エコー強度と運動器リスクとの関連、転倒予測、口腔機能低下背景因子の把握、MoCA-J低下の予測因子、脳由来神経栄養因子の意義の疫学的検討などの成果があがっている。本年度に行われた追跡調査そのものも今後の研究に結びつく研究成果と考えられる。 ・研究は着実に進められていると思う。 ・目標の達成度は高く、学術的な知見も十分得られ、成果が今後さらに発表されることが期待される。	
3 研究成果の還元	平均3点
・報告書には「なし」と書かれている。長期縦断研究の継続により今後、研究成果の還元は大いに期待できるが、現時点は研究の初期段階でデータ集積の基礎の段階であるため、表記のような評価となった。 ・都民への還元は道半ばである。 ・行政・地域への施策への貢献・反映は今後さらにされることが期待される。	

評点の理由、コメント

●高齢期の健康と自立の維持と要介護予防のための新たな検診システムの開発研究とした研究

4 今後の展望と発展性	平均4点
・今後、確実なデータの収集と蓄積による縦断研究継続によって、大きな成果があがることが期待できる。 ・具体的な成果物として普及されることを期待する。 ・中期目標の達成に向けた研究の方向性は適切であり、その内容も妥当である。 本研究の必要性は高く、妥当性もあり、発展性も期待されるが、本研究の方向性の評価はチーム研究との棲み分けにあると考える。	
5 総合評価	平均3. 6点
・本研究は、後期高齢者の健康と自立の維持、老年症候群の予防を目指した新しい検診システムと、それによってスクリーニングされたハイリスク高齢者に対する介入プログラムを効率的に運用することを目指した縦断研究である。研究目的は重要であり、本年度は研究の初期であるため、研究成果の還元などは未達成であるが、今後、確実に縦断研究が進められることにより貴重な成果が得られることが期待できる。 ・研究達成に向けスピードアップを望む。 ・意義がある研究であり、研究成果を期待できる領域であるが、チーム研究との棲み分けがこの研究の評価になると考える。 ・研究成果から得られると期待される各項目の意義は分かるが、そもそも後期高齢者への検診は社会として本当に必要なのか、私は疑問に思う。 ・3. 各結果が新たな検診システムの開発という目的にどのように結びつくかがまだ明確でないように思われる。	
6 評価を終えて	
・上述の通り、センターとして推進すべき研究と考える。	

社会科学系 外部評価委員会 評価結果

【各5点満点】

●都市高齢者の社会・経済・健康格差を乗り越える研究 リーダー：大渕修一

委員	1 研究計画の創造性・妥当性	2 研究成果	3 研究成果の還元	4 今後の展望と発展性	総合評価
平均	4.2	3.2	2.6	3.8	3.26

5点×3名

3点×2名

5点×1名

3点×3名

2点×1名

3点×3名

2点×2名

5点×2名

4点×1名

3点×1名

2点×1名

4テーマ中4位

評点の理由、コメント

1 研究計画の創造性・妥当性	平均4.2点
・本研究は、都市高齢者の社会、経済の変化と、健康格差との関連を長期縦断研究で明らかにし、政策提言を行うことを目的としている。とくに追跡調査の脱落者に対しても訪問調査で転帰等を明らかにし、自治体との連携によって救済策を検討するという方法は、独創的であり必要かつ有用であると考えられる。他機関、研究チームとの連携も認められる。 ・独居、孤立化を踏まえていることが特徴的である。 ・本研究内容は独創性・新規性に富んでおり、また、その研究内容は時代の要請に合致しており、必要性は極めて高い。 ・今後の社会を考えると、意義は大きいだろう。	
2 研究成果	平均3.2点
・本年度は、長期縦断研究の初期にあたり、基礎調査が行われた段階であり、学術的知見や成果の発表等は未達成であるが、本年度の調査が確実に行われることは、2020年度までの長期縦断研究に不可欠な基盤となるため、重要である。その意味では、昨年度の予備調査結果に基づき、基礎調査を計画し実施すること自体が本年度の成果と考えられる。 ・目標の達成・学術的な知見はこれからであり、成果が今後さらに発表されることが期待される。 ・始まったばかりだと理解している。	
3 研究成果の還元	平均2.6点
・本年度は、長期縦断研究の基礎となる調査の段階であり、社会的還元は行っていない、と報告書に述べられている。長期縦断研究の継続により今後、研究成果の還元は大いに期待できるが、現時点は研究の初期段階でデータ集積の基礎の段階であるため、表記のような評価となった ・興味深い研究であるが、具体の成果物が必要である。 ・行政・地域への施策への貢献・反映は今後強く期待される。 ・始まったばかりだと理解している。	

●都市高齢者の社会・経済・健康格差を乗り越える研究

4 今後の展望と発展性	平均3. 8点
・不参加者で非応答者の特性は気になるところであるが、これは研究の倫理にもかかわる調査の限界とも考えられるので、不参加者の応答者を長期に確実に追跡することが可能となれば、貴重な研究成果が得られると期待できる。 ・独居となる要素は、非婚、離婚の増等もあり、在宅を支える家族そのものが存在しない状況も多くなっていくことから成果を早く見たい。 ・中期目標の達成に向けた研究の方向性は適切であり、その内容も妥当である。 本研究の必要性は高く、妥当性もあり、発展性が強く期待される。	
5 総合評価	平均3. 26点
・本研究は、都市に居住する高齢者の社会、経済的変化と健康格差との関連を長期縦断研究により明らかにし、その結果に基づき対応に関する提言を行うことを目的としている。調査への不参加者を追跡し、その背景を明らかにすることは、貴重な成果となることが期待できる。訪問調査体制の整備、民間企業や団体との協力体制によるアクションリサーチを進めることができれば、有用かつ独創的な研究となり得ると考えられる。 ・大変意義深い研究であり、研究成果を大いに期待される領域である。 研究組織が病院部門も含め、社会科学系全体が包含されたチームとなっており、本センターの社会科学系総力の力を結集した研究としてその成果が待たれる。 ・民間企業や団体との連携により、実地的なアクションリサーチが実施されることを期待する。 ・2. これからの時代、重要なテーマと考えるが、格差をどのように明らかにしようとしているかが不明確である。まだ研究成果が見られていない。	
6 評価を終えて	
・上述の通り、センターとして強力に推進すべき研究と考える。	

6 評価を終えて

・すべての研究に関しての感想を、ここにまとめて述べさせて顶きます。全体として目的も明確であり、必要性の高い研究を実施され、着実な成果があがっていると考えられます。また、研究所内外の研究者および病院との連携も適切に行われており、東京都の施策との結びつきも考慮されていると評価できます。外部資金の導入や、研究成果の発表および社会に対する発信還元も活発に行われていると思われます。こうしたことを前提として、今後に向けて検討して頂きたいことを申し上げます。各チーム内、各チーム間、および長期縦断研究の内容が、整理され統合されることを期待致します。研究者が、複数の研究に関わっていることは重要ですが、ある研究から生まれた成果や課題が、他の研究に活かされるというような研究間の有機的相互関連が高まれば、一層効果的な研究成果が上がるのではないかと考えられます。また、東日本大震災被災者支援研究および長期縦断研究は、いずれも重要な研究であり、本研究所の特性を活かしたものと考えられます。ただ、いずれの縦断研究も本年度は初期に当たるため、とくに研究の還元に関しては評価に該当しないと思われました。今後の研究の発展と成果を期待しております。最後に、非公式に外部評価委員会に関する感想を申し上げます。これまで第一期中期計画の外部評価委員会に出席させて頂きましたが、研究が多数かつ多様で、発表の時間が限られているため、折角の貴重な内容が未消化に終わった印象でした。今後、様々な対応が考えられると思われませんが、外部評価者にとりましては、各発表を中期計画および当該年度の計画と4つの評価の観点に沿って、スライドの枚数を一定以内に決めるなどして、明確に焦点を絞って発表して頂けると、大変理解し評価し易くなると思われました。既に報告書では、このような形式でまとめて頂いておりますので、発表もこれに、もう少し準拠して頂けると良いのではないのでしょうか。今後のご参考にして頂ければ幸いに存じます。

・昨年度も感じたことであるが、社会科学系全般に共通の感想として、3チームがそれぞれ独自の研究目的、研究計画、研究体制で研究を実施することは当然と言えば、当然であるが、内容的に若干重複があるものもあり、研究を実施する上で、市区町村等との連絡・調整など、さまざまな事務作業等があり、研究の効率的な実施、運営に資することを考慮すると、チームを超えた協力体制の整備も意味があるのではないかと感じた。ただ、今年はむしろ、棲み分けるのではなく、いい意味で競争して、良い成果を出し合っていくことの方が望ましい在り方であると感じた。

本センターに対する社会、研究者、学会など多くの人、機関、さらには東京都はじめ自治体の期待の大きさは相当のものである。日本における社会科学系老年学の牽引者としての貴センターは役割は大変大きく、その研究成果の政策決定への影響力などを考えると、東京都の宝であるばかりでなく、世界に誇る日本の知の財産である。

・(福祉と生活ケア研究チームだけでなく、)全体に関してのコメント:チーム間連携もあって研究が推進されることは意義深いと思う。これを推進して研究活動評価を行うには、チームに分類されたテーマの重なりを含むチームごとの評価でなく、研究テーマごとの評価の方がより良いのではないかと感じた。

東京都健康長寿医療センター研究所外部評価委員会設置要綱

22健事第1174号
平成22年12月24日制定

(設置目的)

第1条 地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター 東京都健康長寿医療センター研究所（以下「研究所」という。）が実施する研究について、厳正な評価を行い、もって、より効率的・効果的な研究活動を推進し、都民である高齢者のための健康維持や老化・老年病予防に寄与する研究体制づくりに資することを目的として、外部評価委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(所掌事務)

第2条 委員会の所掌事務は、次のとおりとする。

- (1) 前条に定める研究の評価を行うこと。
- (2) 前号の研究評価を実施した後、速やかに、評価結果及びその概要をとりまとめ、必要な意見を付して、センター長及び研究推進会議に報告すること。
- (3) その他、センター長が必要と認める事項

(組 織)

第3条 委員会は、次の各号に定める委員会とし、各委員会に委員長を置き、委員長は、委員の互選により選出する。

- (1) 自然科学系研究外部評価委員会
- (2) 社会科学系研究外部評価委員会
- 2 委員長は委員会を招集し、会議を主宰する。
- 3 委員長に事故がある時は、あらかじめ委員長が指名した委員が委員長の職務を代行する。

(構 成)

第4条 各委員会は、次の各号に掲げる評価委員（以下、「委員」という。）5名以内をもって構成し、委員はセンター長が委嘱する。

- (1) 学識経験者 3名以内
- (2) 一般都民を代表する有識者又は老年学に造詣が深い者 1名以内
- (3) 行政関係者 1名以内
- 2 各委員会は、それぞれの委員の過半数の出席により成立する。
- 3 委員長は、必要と認めるときは関係者に委員会への出席を求めることができる。
- 4 委員長は、必要と認めるときに部会を設けることができる。部会長は委員の中から委員長が指名するものとする。

(評価項目及び評価視点)

第5条 評価項目及び評価視点はおおむね次のとおりとする。

- (1) 研究計画の独創性・妥当性（研究内容の独創性・新規性・必要性、病院や他チームとの連携など総合力）
- (2) 研究成果（目標の達成度、学術的な知見、成果の発表）
- (3) 研究成果の還元（行政施策・地域・産業への反映、提言、審議会への参画）
- (4) 今後の展開と発展性（中期計画達成に向けた研究の方向性や内容、研究継続の方向性・必要性・妥当性・発展性）

(公 開)

第6条 委員会及び委員会に係る資料、要点記録（以下「資料等」という。）は公開する。

ただし、委員長あるいは委員の発議により、出席委員の過半数で決議したときは、委員会又は資料等を公開しないことができる。

2 委員会及び資料等を公開するときは、委員長は、必要な条件を付することができる。

(評価結果の公表及び開示)

第7条 センター長は、評価結果の概要を公表する。

2 センター長は、研究チームの代表者から求めがあった場合、研究チームの代表者に、当該研究チームの行う研究に係る評価結果を開示することができる。ただし、委員会で決議のあった事項については、開示しないことができる。

(庶 務)

第8条 委員会の庶務は、経営企画局事業推進課において処理する。

(雑 則)

第9条 この要綱に定めるもののほか、外部評価の実施に関し必要な事項は理事長が定める。また、委員会の運営に必要な事項は委員長が別に定める。

附 則

この要綱は、平成22年12月24日から施行する。

東京都健康長寿医療センター研究所外部評価委員会実施要領

22 健事第 1174 号

平成 22 年 12 月 24 日制定

(目 的)

第 1 この要領は、東京都健康長寿医療センター研究所（以下、「研究所」という。）外部評価委員会設置要綱の規定に基づき、研究の外部評価の実施について必要な事項を定めることを目的とする。

(評価の対象)

第 2 研究評価は、研究所で行われるチーム研究・受託・共同研究等による研究を対象とする。

(評価の実施)

第 3 研究評価は、原則として、毎年度実施するものとする。

(評価委員及び評価の方法)

第 4 研究評価は、次の方法により行う。

- 2 評価は、外部評価委員会の委員により、研究報告書等により行う。
- 3 評価の実施にあたり、外部評価委員会は研究に関するプレゼンテーションを研究部長等に行わせることができる。
- 4 当分の間は、研究進行管理報告会も併せて行うこととし、理事長、センター長、経営企画局長、副所長等を参画させることができる。

(評価基準)

第 5 研究評価の評価基準は、評価項目ごとに別に定める。

(評価結果の活用)

第 6 センター長は、研究評価の結果を主に次により活用する。

- (1) 研究チーム・テーマの再編
- (2) 研究目的、研究計画、研究体制などの設定
- (3) 研究資源の配分
- (4) 研究所のビジョンや重点研究、プロジェクト研究の再構築

(雑 則)

第 7 この要領に定めるもののほか、外部評価の実施に必要な事項は、研究推進会議の議を経て、センター長が定める。

附 則

この要領は、平成 22 年 12 月 24 日から施行する。